

福住と申します。

美術評論という仕事をしておりまして、新聞とか Web マガジン、展覧会の図録などに文章を寄せる仕事をしています。大学の授業をいくつか持っておりまして、今日はその中からアウトサイダーアートというテーマについてお話をしたいと思います。

アウトサイダーアートというのは、明確な定義があります。それは専門的な美術教育を受けていない独学者が自発的に創作した物や事を指しています。3 つポイントがありまして、1 つは美術教育を受けていない。つまり大学や専門学校、画塾で美術を専門的に学んでいないということです。

2つめのポイントが、独学者ということで、これは誰か先生に教えられたわけではなくて、自分で勝手に絵を描いたり、物を作ったり、方法を編み出している人たちのことを独学者といいます。

3番目のポイントが、自発性です。これは誰かに促されて物や事を作っているわけではなくて、あくまでも自分で発信して自分で物を作っている。そういう3つの条件で成り立っているのが、アウトサイダーアートの定義ということになります。

もともとの始まりは、フランスの画家のジャン・デビュッフェという人です。この人は1901年に生まれ、1985年に亡くなったフランスの画家です。実家はワイン商で、実家の家業を手伝いながら独学で絵を学びました。

つまり、自らアウトサイダーだったわけです。

彼が自分でも絵を描いていたわけですが、その絵がこの、ご婦人の体といわれている作品です。体ということですから、上に頭。髪の毛があり、真ん中に胴体、胸があり、2本足で立っているというような絵ですね。

自分自身でも絵を描いていたんですけども、コレクターでもありまして、他の人の描いた絵を買い集めるという仕事もしていました。

どういう絵を買い集めていたかという、いわゆるアウトサイダーの絵を買い集めていたわけですが、具体的にいうと、精神病院や刑務所を訪問して、そこにいる人たちが描いた絵をたくさん買い集めるような活動をしていました。芸術を知らない人たちの中に、本当の芸術の無意識があるはずだ。ジャン・デビュッフェはそう考えて、大学や美術館ではなくて精神病院や刑務所を訪問して、そこで描かれている絵を買い集めたということです。

それを専門的には、アールブリュット といいます。これは日本語に訳すと、生の芸術とい

って、これは生ではなく「きのげいじゅつ」と読むんですが、生成りの「き」ですね。

1945年にスイスに調査旅行に行ったときに、精神病院や刑務所を訪問したわけですが、そこで2人の重要な画家に出会いました。1人は、アドルフ・ヴェルフリ。もう1人がアロイーズという2人でした。この2人の作り手に会うことによって、そこには自然のままの加工されていない野生の、原始的な芸術があるというふうに認めまして、それをアール・ブリュット、生の芸術と。何ものにも汚されていない自然のままの、天然の芸術ということですね。ということでアール・ブリュットと名付けたということです。

その2人のうちの1人がアドルフ・ヴェルフリです。この人は男性です。慢性的な精神分裂病を患っており、35年、生涯、入院していました。35歳で亡くなったんですね。

で、あるとき、幼児に性的ないたずらをしてしまって病院に入ったわけですけども、モルゲンターラーというお医者さんがベルフリ絵を見てですね、芸術家として発見したわけですね。この絵は非常に独創的な絵なんですけども、一見してお分かりのように、顔が真ん中にあるんですが、その周囲を覆っているのが楽譜になっています。つまり、音符をいっぱい書き込んだ楽譜が、顔の周りにおびただしく何層にも折り重なっているという絵なんです。ですから彼にとっては、絵と音楽というものが分かちがたく結びついていて、それを1つものとして視覚化したものが絵画ということになっています。